

# 『程氏家塾読書分年日程』訳注（六）

松野 敏之・中嶋 諒

本稿は、朱子学研究会の読書会で扱った程端礼『程氏家塾読書分年日程』の訳注を試みるもので、本誌第一三号からの連載である。読書会の参加者は、以下の通りであり、本稿は担当者（氏名の上に「※」を表記）の草稿を元に作成している。

清水則夫（早稲田大学理工学術院講師）・北澤絃一（早稲田大学文学学術院講師）・\*宮下和大（早稲田大学助手）・阿部光麿（早稲田大学文学学術院講師）・大場一央（早稲田大学文学学術院講師）・\*小池直（早稲田大学大学院博士後期課程）・原信太郎アレシヤンドレ（早稲田大学大学院博士後期課程）・中嶋諒（早稲田大学大学院博士後期課程）・\*松野敏之（早稲田大学文学学術院講師）

## 【凡例】

・底本には常熟瞿氏鐵琴銅劍樓藏元刊本（四部叢刊所収）を用い、叢書集成本（清刊本・正誼堂全書本）・四庫

全書本との校異を示した。但し、煩を避けるため、異体字・通仮字・同義語の類の異同は割愛した。

・ 解釈には、『程氏家塾読書分年日程』（昌平叢書所収）および姜漢椿 校注『程氏家塾読書分年日程』（黄山書社 出版、一九九二年四月）を参照した。

・ 訳注は、原文・校異・注釈・通釈の順で並ぶ。

・ 原文・訳文中の「」を附した部分は、底本では割注に相当する。

・ 注釈・訳文中で引用した原文には「」を附して訓読を示した。但し、一読して明らかな場合には省略している。

・ 訳文中で（ ）を附した部分は、訳者の補注である。

【『程氏家塾読書分年日程』卷二（底本 卷二・十六丁表四行〜卷二・二十七丁表三行）】

作科舉文字之法「用西山法。」

讀看近經問文字九日、作一日。

讀看近經義文字九日、作一日。

讀看古賦九日、作一日。

讀看制誥章表九日、作一日。

讀看策九日、作一日。

作他文皆然。文體既熟、旋增作文日數。大抵作文、辦料識格在於平日、「此用剡源戴氏法。」及作文之日、得題、即放膽「此用疊山謝氏法。」立定主意、便布置問架、以平日所見、一筆掃就、却旋改、可也。如此、則筆力不餒。作文以主意爲將軍、轉換開闔、如行軍之必由將軍號令、句則其裨將、字則其兵卒、事料則其器械、當使兵隨將轉。所以東坡答江陰葛延之萬里徒步至儋耳求作文秘訣、曰、意而已。作文事料散在經史子集、惟意足以攝之。正此之謂。如通篇主意問架未定、臨期逐旋擬、用盡心力、不成文矣。切戒。

一、仍以每日早飯前、倍溫四書經注或問、本經傳注、諸經正文、溫史。夜間考索制度書、溫看性理書、如前法。

〔校異〕

a 章表：叢書集成本・四庫全書本、「表章」に作る。 b 意：叢書集成本、「義」に作る。 c 由：叢書集成本・四庫全書本、「繇」に作る。

〔注釈〕

(1) 西山法：西山は、真真德秀の号。真德秀は既出、本誌第一三号一四一頁参照。真德秀の法については、程端礼自注（底本卷二・十六丁）に、「按、西山応挙工程云、時文有四類、一性理、二治道、三故事、四制度。自初一日至初九日、編性理賦、日一道、或半道。如無箋本、即檢經史対過、然後自写。初十

日、作性理賦、或一二課、亦從其便。十一日至十九日、編性理論。二十日、作性理論。二十一日至二十八日、或二十九日、編性理策。論策亦皆檢用事処箋写。月終、則作性理策。次月再輪如初。賦論策、每類只須二三十篇、惟択其最佳者。性理賦畢、編治道賦。治道賦畢、編制度及故事賦。論策亦然。既知格式、又能遣辭、即參以古文。如韓歐曾蘇等集、各取明白純粹、及近於時文者、與時文間読、則散文不患不工。此西山之訓。愚今倣其法、亦以今制三場分四類、輪流編鈔読作」〔按ずるに、西山の応挙工程に云ふ、時文に四類有り、一は性理、二は治道、三は故事、四は制度。初一日自り初九日に至るまで、性理の賦を編すること、日に一道、或いは半道。如し箋本無ければ、即ち經史の對過を檢し、然る後自ら写す。初十日、性理の賦を作ること、或いは一二課、亦た其の便に従ふ。十一日より十九日に至るまで、性理の論を編す。二十日、性理の論を作る。二十一日より二十八日、或いは二十九日に至るまで、性理の策を編す。論・策は亦た皆な用事の処の箋を檢して写す。月終はりしとき、則ち性理の策を作る。次月、再び輪すること初めの如し。賦・論・策は、類毎に只だ二三十篇を須ひ、惟だ其の最も佳なる者を択ぶのみ。性理の賦畢はれば、治道の賦を編す。治道の賦畢れば、制度及び故事の賦を編す。論・策も亦た然り。既に格式を知り、又た能く辭を遣ひ、即ち參するに古文を以てす。韓(愈)・歐(陽脩)・曾(鞏)・蘇(軾)等の集の如きは、各おの明白・純粹、及び時文に近き者を取り、時文と与に間読すれば、則ち散文は工ならざるを患へず、と。此れ西山の訓へ。愚今其の法に倣ひ、亦た今制の三場を以て四類に分ち、編・鈔・読・作に輪流す」とある。

(2) 剡源戴氏法……剡源戴氏は、元戴表元(一二四四〜一三一〇)。字は帥初・曾伯、剡源は号。浙江奉化の

人。著に『剡源文集』の書がある。伝は『元史』卷一九〇、『宋元学案』卷八五など。戴表元の法についての詳細は不明。

(3) 晁山謝氏法：晁山謝氏は、晁謝枋得のこと。晁山は号。謝枋得は既出、本誌第一七号二六五頁参照。謝枋得は、その著『文章軌範』において、字句・文法にこだわらずに表現した文章を「放胆文」と称してまとめている。

(4) 東坡答江陰葛延之：東坡は、北宋蘇軾の号。既出、本誌第一七号二八七頁参照。なおこの箇所は、南宋洪邁『容齋四筆』卷一一・「東坡誨葛延之」の記述、「江陰葛延之、元符間、自鄉県不遠万里、省蘇公於僑耳。公留之一月、葛請作文之法、誨之曰、僑州雖數百家之聚、而州人之所須、取之市而足、然不可徒得也。必有一物以撰之、然後為己用。所謂一物者、錢是也。作文亦然。天下之事、散在經子史中、不可徒使、必得一物以撰之、然後為己用。所謂一物者、意是也。不得錢不可以取物、不得意不可以用事、此作文之要也」(「江陰の葛延之、元符の間(一〇九八〜一一〇〇)、郷県自り万里を遠しとせずして、蘇公を僑耳(現在の広東省僑県)に省す。公之を留むること一月、葛作文の法を請ふに、之に誨へて曰く、僑州 數百家の聚ありて、州人の須もとむる所、之を市に取りて足ると雖も、然れども徒らに得べからざるなり。必ず一物有りて以て之を撰り、然る後己が用と為す。所謂一物とは、錢、是れなり。作文も亦た然り。天下の事、經・子・史中に散在するも、徒らに使ふべからず、必ず一物を得て以て之を撰り、然る後己が用と為す。所謂一物とは、意、是れなり。錢を得ざれば以て物を取るべからず、意を得ざれば以て事を用ふべからず。此れ作文の要なり、と」を踏まえる。

〔通釈〕

科挙の文章を作成する方法。「真徳秀の方法を用いる。」

九日間 最近の経問の文章を読んで、一日作文する。

九日間 最近の経義の文章を読んで、一日作文する。

九日間 古賦を読んで、一日作文する。

九日間 制誥・章表を読んで、一日作文する。

九日間 策を読んで、一日作文する。

その他の文章を作成するにも、みなこのようにする。文体が成熟してきたら、続けて作文の日数を増やしていく。およそ作文は、平日のうち題材を準備し、規格を理解しておいて「戴表元の方法を用いる」、作文をする日になって課題をもらったら、放胆に「謝枋得の方法を用いる」主意を定め、結構を敷き、平日の成果をもつて一気に書き進め、それから改めていくのがよい。このようにすれば、筆力が衰えることはないであろう。作文について、主意を將軍だと考えるならば、転換や展開はその行軍が必ず將軍の号令に従うようなもの、また句節は副將、文字は兵卒、題材は器財といえるが、これらの軍兵も（主意たる）將軍に従わせるようにすべきなのである。蘇軾が、遙かな距離を歩いて僮耳たんじ（現在の広東省僮県）にまでやってきて、作文の秘訣を問い求めた江陰の葛延之に対して、「意あるのみだ。作文の題材は、經史子集の書に散在しているが、意のみがこれらを統括することができるのだ」と答えたのは、まさしくこのことを言ったものである。全篇に通じる主意と結構が定まらなければ、いざとなつてあれこれ模索し、心力を尽くしても、ろくな

文章にはならない。切に戒めるところである。

一、毎日朝食の前に、四書の本文・注・或問、五経の本文・伝・注、諸経書の本文を暗誦・復習し、史書を復習する。夜間は制度の書を考察し、性理の書を復習する。これらはみな前述の方法の通りである。

專以二三年工、學文之後、纔二十二三歲、或二十四五歲。自此可以應舉矣。三場既成、却旋明餘經、及作古文。餘經合讀合看諸書已見於前。竊謂明四書本經、必用朱子讀法、必專用三年之功、夜止兼看性理書、並不得雜以他書。必以讀經空眼簿、日填以自程。看史及學文、必在三年外、所作經義、必盡依科制、條舉所主所用所兼用之說、而推明之。又必擇友。舉行藍田呂氏鄉約之目、使德業相勸、過失相規、則學者平日皆知敦尚行實、惟恐得罪於鄉評、則讀書不爲空言、而士習厚矣。必若此、然後可以仰稱科制、經明行修、鄉黨稱其孝弟、朋友服其信義之實。庶乎其賢材盛而治教興也、豈曰小補。古者大司徒以鄉三物教萬民、而賓興之。未有不教而可以賓興者。方今聖朝科制、明經一主程朱之說、使經術理學舉業三者合一、以開志道之士。此誠今日學者之大幸、豈漢唐宋科目所能企其萬一。第因方今學校教法未立、不過隨其師之所知所能、以之爲教爲學。凡讀書纔挾冊開卷、已準擬作程文用、則是未明道已計功、未正誼已謀利、其始不過因循苟且、失先後本末之宜而已、豈知此實儒之君子小人所由以分、其有害士習乃如此之大。嗚呼、先賢教人格言大訓、何乃置之無用之地哉。敢私著於此、以待職教養者取焉。

〔校異〕

a 由：叢書集成本・四庫全書本、「繇」に作る。

〔注釈〕

(1) 三場：漢人・南人の考試程式を指す。本誌第一七号二八九頁参照。ここでは三場に向けた学問のこと、すなわち先の「読看近経問文字九日」以下の内容を指している。

(2) 藍田呂氏郷約：<sup>北条</sup>呂大鈞『郷約』。「徳業相勸」・「過失相規」等、郷人の規約を定めた書。いまは単著として伝わらないが、陳俊民（輯校）『藍田呂氏補遺輯校』（中華書局、一九九三年一月、五六三〜五七〇頁）にまとめられている。

呂大鈞（一〇三一〜一〇八二）、字は和叔、号は京兆。陝西藍田の人。弟の呂大臨とともに、張載に従学する。著に『誠徳集』の書がある。伝は『宋史』卷三四〇、『宋元学案』卷三一など。

(3) 郷三物：六徳・六行・六芸を指す。『周礼』大司徒に「以郷三物教万民、而賓興之。一曰六徳、知仁聖義忠和。二曰六行、孝友睦婣任恤。三曰六芸、礼楽射御書数」（郷の三物を以て万民を教へて、之を賓興す。一に曰く六徳、知・仁・聖・義・忠・和なり。二に曰く六行、孝・友・睦・婣・任・恤なり。三に曰く六芸、礼・楽・射・御・書・数なり）とある。

〔通釈〕

専ら二三年の課程をもつて、文章を学んでいくと、せいぜい二十二、三歳、あるいは二十四、五歳となる。これより以後は、科挙に応じることができる。三場の準備が整ったなら、続けて他の経書を明らかにし、また古文を作成する。他の経書や当然読むべき書については、すでに前で述べておいた。思うに、四書・五経を



明らかにするには、必ず朱子の読書法に基づき、ひたすら三年間は努力し続け、夜間は性理の書を併せ読むだけにして、決して他の書籍を交えたりしないことだ。必ず「読経空眼簿」を用いて、毎日自ら課程を書き込んでいく。史書を読むこと、文章を学ぶことについては、必ずその三年以後に行うようにする。経義を作るには、みな実際の試験に依拠し、主説・傍証・汎用の説を列挙しながら、明らかにしていく。また必ず友を選ぶことである。呂大鈞りょたいきん『郷約』の項目を実行し、互いに徳行に勤め、過失を戒めあうようにするならば、学ぶ者はみな、普段から日頃の行いを尊重することを知り、郷里によからぬ評判が立つことを恐れるようになる。すると、読書に努めて虚言を放つこともなくなり、士人の気風も厚くなるものだ。このようであつてこそ、科挙試験を仰ぎ称え、経は明らかに、行いは修まり、郷里ではその孝悌たるさまを賞賛し、朋友はその信義の実に敬服するのである。優れた人材が溢れて、治教が振興していくならば、それは些細な補益どころの話ではない。古くは大司徒が、郷の三物によつて万民を教え、優れたものを推挙していた。教えもせずに推挙することはなかったのである。いま偉大なる元王朝の科挙制度において、明経科はひとえに程朱の説を主としており、経術・理学・科挙の勉強の三者を統合させて、道に志す士らに門戸を開いている。これは誠に今日の学者の幸いであり、漢・唐・宋代の科挙がその万分の一も企図することのできなかったことである。ただ現在の学校での教法はまだ確立しておらず、師の知識や能力に応じて、教・学としているだけに過ぎない。

およそ読書は、冊巻を開くやすぐに答案作成に役立てようなどという腹づもりであれば、道を明らかにすることなく功を謀り、義を正すことなく利を謀っているようなものである。最初から摸倣ばかりでいいかげ

んにごまかし、先後や本末の宜しきを失っているに過ぎない。だが、これこそが真儒たる君子と小人との分かれ目であるということを知る由もない。士人の氣風を害すること、これほどまでに甚だしいのである。ああ、先賢が教えられた格言や大いなる訓えを、無用の地へと置き去りにしてよいものだろうか。謹んでここに記し、教職にあたる者がこれを採り入れてくれるのを待ちたい。

右分年日程。一用朱子之意修之。如此讀書學文皆辦、纔二十二三歲、或二十四五歲。若緊著課程、又未必至此時也。雖前所云失時失序者、不過更增二三年耳。大抵亦在三十歲前皆辦也。世之欲速好徑、失先後本末之序、雖曰讀書作文、而白首無成者、可以觀矣。此法似乎迂闊、而收可必之功、如種之穫云。

前所云學文之後、方再明一經、出於不得已。纔能作文之後、便補一經不可遲。須是手自鈔讀。其諸經鈔法讀法、並已見前。

其餘經史子集音義旁證等書、別見書目、今不備載。「惟取旁證一二日當觀省者于末卷。」

讀經之後、當看全史一過。

看張子、邵子、三胡、張南軒、呂東萊、真西山、魏鶴山、程朱門人之書一過。

〔校異〕 異同なし。

〔注釈〕

(1) 前所云失時失序者：『分年日程』卷一に、「或十五歲前用工失時失序者」〔或いは十五歲前の工を用

ふるに時を失ひ序を失ふ者」云々(底本卷一・十五丁)とある。本誌第一六号一二七頁参照。

(2) 旁証一二日当観省者于末卷…『分年日程』卷三には、南宋王柏『正始之音』、南宋鄭樵『通志』六書略等  
が収められており、これらの諸書を指す。

(3) 張子…北宋張載。著に『西銘』『正蒙』『易說』等がある。本誌第一四号一一〇頁参照。

(4) 邵子…北宋邵雍(二〇一一〜二〇七七)、字は堯夫。河北范陽の人。易学に精通し、著に『伊川擊壤集』、  
『皇極經世書』などの書がある。伝は『宋史』卷四二七、『宋元学案』卷九、十など。

(5) 三胡…南宋胡安国・南宋胡寅・南宋胡宏を指す。胡安国は、既出。『春秋胡氏伝』等の著書がある。本誌第  
一三号一二〇頁。胡寅は、胡安国の子。『読史管見』等の著書がある。本誌第一七号二六〇頁。胡宏(一  
一〇六〜一一六二)は、字は仁仲、号は五峰。胡安国の子。福建建寧の人。著に『知言』、『皇王大紀』  
などの書がある。伝は『宋史』卷四三五、『宋元学案』卷四二など。

(6) 張南軒…南宋張栻(一一三三〜一一八〇)、字は敬夫、南軒は号。四川広漢の人。著に『易說』、『癸巳  
論語解』、『南軒文集』などの書がある。伝は『宋史』卷四二九、『宋元学案』卷五〇など。

(7) 呂東萊…南宋呂祖謙、東萊は号。『呂氏家熟読詩記』『東萊左氏博議』『東萊集』等の著書がある。本誌  
第一六号一二三五頁。

(8) 魏鶴山…南宋魏了翁(一一七八〜一二三七)、字は華父、鶴山は号。四川蒲江の人。著に『九經要義』、  
『鶴山先生大全文集』などの書がある。伝は『宋史』卷四三七、『宋元学案』卷八〇など。

〔通釈〕

右、『程氏家塾讀書分年日程』。ひとえに朱子の意をもつて作成した。このように讀書し文章を学び、全てをこなしていけば、せいぜい二十二、三歳、あるいは二十四、五歳である。もしも課程を緊密にしたならば、さらに若いうちにこなせることだろう。前述した時期と手順を違えた者でも、二、三年ほど余分にすればよいだけである。おおよそ三十歳以前にはこなしてしまうこととなる。速成することを願ひ、抜け道を好んでは、先後や本末の順序を過ち、讀書して文章を作っているとはいひながら、結局、白髪になるまで何ら成果のない世の者たちは、どうか参考にして欲しい。このやり方は迂遠に見えようが、必然の成果を得ること、種を撒いて收穫するかのごとくである。

前述した通り、文章を学んだ後、改めて一經を明らかにすることは、やむを得ないことである。少しでも文章が作れるようになったならば、すぐに一經を補うようにして、遅らせてはならない。また自らの手で書き写し読まなければならない。諸經の鈔法と説法については、みな前述の方法の通りである。

その他の經史子集、音義・傍証等の書は、別に書目に示すので、ここでは詳しくは載録しない。「日々参照すべき一、二の傍証を卷末に収めるにとどめた。」

經書を読んだ後には、全ての史書を一通り読む。

張載・邵雍・胡安国・胡寅・胡宏・張栻・呂祖謙・真德秀・魏了翁・程朱門人の書を一通り読む。

批點經書凡例。

館閣校勘法<sup>1)</sup>

句讀二字、側點爲句、中點爲讀。凡人名地物名、并長句内小句、並從中點。

〔校異〕異同無し。

〔注釈〕

(1) 館閣校勘法：宋代の國家藏書機構である三館（昭文館・史館・集賢院）と秘閣において用いられた句讀法のこと。本誌第一五号五二頁参照。

〔通釈〕

經書への批点の施し方の凡例。

館閣校勘法。

句点・読点の二者は、傍らに付す点を句点とし、中央に付す点を読点とする。およそ人名・地名・物名や、長い句の中の一區切りの短句については、すべて中央に点に施す。

勉齋批點四書例<sup>1)</sup>

句讀例。

句。

舉其綱。文意斷。

讀。

者也相應。文意未斷。覆舉上文。上反言而下正。上有呼下字。下有承上字。

點抹例。

紅中抹。〔二本作黃旁抹。〕

綱。凡例。

紅旁抹。

警語。要語。

紅點。

字義。字眼。

黑抹。

考訂。制度。

黑點。

補不足。

〔校異〕異同無し。

〔注釈〕

(1) 勉齋：黄榦黄榦。勉齋は号。既出、本誌第一五号五二頁参照。

〔通釈〕

黄餘の四書への批点の施し方の例。

句点・読点の例。

句点。

綱領を挙げている。文意が途切れている。

読点。

「者」字と「也」字とが対応している。文意が途切れていない。繰り返し上文を挙げている。上の句が逆説で、下の句が正論である。上の句が下の句と呼応している。下の句が上の句を受けている。

点・抹の例。

朱墨による抹線。「ある版本では、「黄墨による傍線」とある。」

綱領。凡例。

朱墨による傍線。

注意すべき語句。重要な語句。

朱墨による点。

字義。要となる文字。

墨による抹線。

考訂。制度。

墨による点。

不足の補い。

實<sup>レ</sup>勉齋例。

舉其綱爲句。

如大學之道、在明明德。在親民。在止於至善。

文意斷爲句。

如此對小子之學言之也。

者也相應爲讀。

如大學者、大人之學也。

文意未斷爲讀。

如言既自明其明德、又當推以及人、使之亦有以去其舊染之污也。

覆舉上文爲讀。

如曰、然則此篇所謂在明明德、在親民、在止於至善者、亦可得而聞其說之詳乎。

上反言而下正爲讀。

如不親其親、不長其長、則所厚者薄、而無以及人之親長。

上有呼下字爲讀。



如中庸何爲而作也、子思子憂道學之失其傳而作也。

下有承上字爲讀。

如德者本也、財者末也。

〔校異〕

a 實：四庫全書本、「釋」に作る。 b 親：叢書集成本、「新」に作る。

〔通釈〕

實際の黄榦の例。

綱領を挙げている場合は、句点を施す。

例えば『『大学章句』経にいう、「大学之道、在明明徳。在親民。在止於至善。」（大学の道は、明徳を明らかにするに在り。民を親（新）たにするに在り。至善に止まるに在り。）など。

文意が途切れている場合は、句点を施す。

例えば『『大学或問』にいう、「此对小子之学言之也。」（此れ小子の学に対して之を言ふなり。）など。

「者」字と「也」字とが対応している場合は、読点を施す。

例えば『『大学章句』経にいう、「大学者、大人之学也。」（大学なる者は、大人の学なり。）など。

文意が途切れていない場合は、読点を施す。

例えば『『大学章句』注にいう、「言既自明其明徳。又当推以及人、使之亦有以去其旧染之汚也。」（既

に自ら其の明德を明らかにし、又た当に推して以て人に及ぼし、之をして亦た以て其の旧染の汚を去る有ら使むるべきを言ふなり。」など。

繰り返して上文を挙げている場合は、読点を施す。

例えば『大学或問』にいう、「曰、然則此篇所謂在明明徳、在親民、在止於至善者、亦可得而聞其説之詳乎。」(曰く、然らば則ち此の篇に謂ふ所の明德を明らかにするに在り、民を親(新)たにするに在り、至善に止まるに在りとは、亦た得て其の説の詳らかなることを聞くべきか。)など。

上の句が逆接で、下の句が正論である場合は、読点を施す。

例えば『大学或問』にいう、「不親其親、不長其長、則所厚者薄、而無以及人之親長。」(其の親を親とせず、其の長を長とせざれば、則ち厚くする所の者薄くして、以て人の親・長に及ぶこと無し。)など。

上の句が下の句と呼応している場合は、読点を施す。

例えば『中庸章句』序にいう、「中庸何為而作也。子思子憂道学之失其伝而作也。」(中庸は何の爲にして作れるや、子思子道学の其の伝を失はんことを憂へて作るなり。)など。

下の句が上の句を受けている場合は、読点を施す。

例えば『大学章句』伝十章にいう、「徳者本也、財者末也。」(徳とは本なり、財とは末なり。)など。

續補句讀例。「並以朱子門人以下諸儒所點修之。」

一、曰字，是作本書者，記當時對面答問之辭者，並作句。曰字是援引他書他日他人之言，止作言字說者，並無點。有句長欲讀者，寧讀於上文，仍以曰字連下文。

一、凡呼小子，或二三子，或參乎，對面呼之，而欲重其聽者，皆爲句。

一、綱在上而目在下者，綱爲句，目爲讀，目盡爲句。

一、目在上而綱在下者，諸目皆讀，目盡爲句，綱獨爲句，或下是繳語，解語，意短急者，目盡爲讀。

一、無綱之目，並爲讀，目盡爲句。

一、無綱之目，每目自有抑揚，及自解者，解盡爲讀，目盡爲句。「如易三陳九卦則可，中庸九經則不可，更詳文義所宜。」

一、有綱之目，每目自有抑揚，及自解者，解盡爲讀，目盡爲句。「同前例。」

一、上段正下段反，或上段反下段正，短者可爲讀，若是長段反正，有然字轉者，及有大轉語辭者，當爲句。

一、引用他書他人語，上有所謂字，下有者字，急繳歸主意者，所引句下者字爲讀，繳語盡爲句。

一、凡引他書他人他日，及覆舉上文之辭者，其中未盡之語爲讀，至所引辭盡爲句。「如所引他書語及事實太長，如孟子引齊景公晏子答問，各以答問盡處爲句。」

一、凡詩銘韻語，以韻爲句，未至韻皆讀。「此謂特意全載者，若經傳中引者，如引書例，至引盡處方爲句，更詳文義所宜。詩經自依章句。」

一、凡議論體、自然讀多句少。

一、凡敘事體、自然句多讀少。「意未盡者、或爲讀、亦可。」

一、提解經文訓詁、某者某也之下意盡者、以也字爲句、如貼解本意未盡者、雖也字亦爲讀、至意盡方爲句。

〔某也下如插見章旨者、也字別爲句、更詳文意所宜。〕

一、注文釋經訓詁、就兼見章旨、以義已明、不再通說經文、後即以大圈斷之者、其中章旨未盡、小句皆讀、意盡爲句。「如止釋訓詁、欲人自玩味經文者、不當拘此。」

一、以言字通敘貼解一段經文大意者、並讀、意盡方爲句。亦有無言字、而意實貼解段意者、並同。

一、敘論發明文義、本意已盡爲句、其下有繳歸章旨、及別貼贊歎勸勉之辭以結者、別爲句。

一、上發明所以然、下以此字或是字、再指上段、繳歸所當然、或繳歸主意者、此字是字上並爲句、下段如文意短急者、此字是字上爲讀。

一、上發明所以然、下以故字繳歸所當然者、故字上爲讀、如是長段、故字下發意又長者、故字上爲句。

一、或問中間目之末、何也、若何而用力邪、奈何、亦可得而聞其說之詳乎、如之何之類、何也之上、並讀。

或何也之上無者字者、及句短者、不讀。或大段內自提問己意、何者、何哉、何則、何也之類、又自發大段意者、何者之上、並句。

〔校異〕

a 一：叢書集成本・四庫全書本、此の字無し。 b 一：叢書集成本、此の字無し。 c 至：叢書集成本、「到」

に作る。 d 句多讀少：叢書集成本、「讀多句少」に作る。 e 句短：叢書集成本・四庫全書本、「短句」

に作る。

〔通釈〕

句点・読点の例に関する補足「みな朱子門人をはじめとする諸儒の点の附し方によって作成した。」

一、「曰」字が、執筆者と当時の人々とのやりとりを記録した言葉の場合は、ともに句点を施す。「曰」字が、他書・他日・他人の言葉を引用している場合や、単に「言」の字の意味で使われている場合は、いずれも点を施さない。あるいは一句が長くて、読点が欲しい場合は、むしろ直前の文字で読点を施し、「曰」字は下文に連ねるようにする。

一、およそ「小子」、「二三子」と呼ぶ場合、あるいは「参乎」（参<sup>と</sup>や）というように、対面して呼びかけて、真剣に聴くよう促している場合は、すべて句点を施す。

一、綱領が上にあつて条目が下にある場合は、綱領には句点を施し、条目には読点を施して、条目が終わったところで句点を施す。

一、条目が上にあつて綱領が下にある場合は、条目それぞれに読点を施し、条目が終わったところで句点を施して、綱領は単独で句点を施す。あるいは下文がまとめや解説であつて、語気が短く急迫である場合は、条目が終わったところでも読点を施す。

一、綱領のない条目は、みな読点を施して、条目が終わったところで句点を施す。

一、綱領のない条目で、条目ごとに抑揚が付いていたり、解説が施されたりしている場合は、解説が終わったところで読点を施し、条目が終わったところで句点を施す。『易』の（繫辞下伝に基づく）「三陳

九卦」には採用し、『中庸』(章句二十章)の「九經」には採用しないとすると、いっそう文義がはっきり通じるようになる。」

一、綱領のある条目で、条目ごとに抑揚が付いていたり、解説が施されたりしている場合は、解説が終わったところで読点を施し、条目が終わったところで句点を施す。「前掲の例と同様である。」

一、上段が正論で下段が逆説、もしくは上段が逆説で下段が正論の場合は、短いものであれば読点を施す。長文にわたるもので、逆説・正論が「然」字で反転している場合や、他に反転を示す語がある場合には、句点を施すべきである。

一、他書・他人の言葉を引用したとき、上に「所謂」字、下に「者」字があつて、手短かに注意をまとめている場合は、引用文の下の「者」字には読点を施し、まとめの語が終わったところで句点を施す。

一、およそ他書・他人・他日の言葉の引用や、上文の言辭を繰り返し挙げている場合は、その途中の文意が途切れていない言葉には読点を施し、引用文が終わったところで句点を施す。「他書や事実の引用が非常に長くなる場合、たとえば『孟子』梁惠王下で)孟子が、齊の景公と晏子との問答を引用している箇所では、それぞれの回答や質問が終わったところで句点を施す。」

一、およそ詩・銘や韻文は、押韻するところで句点を施し、押韻しないところはみな読点を施す。「これは韻文全体を載せている場合のことである。もし、経書や伝の中で引用されている場合は、散文を引用する例と同じように、引用の終わったところで句点を施した方が、いっそう文義は明瞭になる。『詩経』の場合は、章句によることとする。」

一、一般的に議論体の文章は、自ずと読点が多くなり、句点が少なくなる。

一、一般的に叙事体の文章は、自ずと句点が多くなり、読点が少なくなる。「文意が途切れていない場合には、読点を施すのもよい。」

一、経文を解釈した訓詁を提示する際、「某者、某也」「某なる者は、某なり」の下で文意が途切れていない場合は、「也」字のところで句点を施す。解説の文意が途切れていない場合は、「也」字であつても読点を施し、文意が途切れたところで句点を施す。「某也」の下にその章の大意を挿入する場合は、「也」字に句点を施し分断した方が、いつそう文義は明瞭になる。」

一、注の文章において、経文を注釈した訓詁に、併せてその章の大意も示す場合や、文義がもう明らかであるからこれ以上は経文を解説せず、末尾に大きな圏点(○)を施して区切りをつけている場合には、章の大意の解説文中においては、小さな区切りにいづれも読点を施し、文意が途切れたところで句点を施す。「ただ訓詁を解釈するにとどめて、読者自身に経文を玩味させようとしている場合は、この例にこだわらなくてよい。」

一、「言」字を用いて経文一段の大意を解説する場合は、みな読点を施し、文意が途切れたところで句点を施す。また「言」字はないが、確実に一段の大意を解説していると窺える場合も、同様である。

一、叙論や文義を解明している場合は、本意が途切れたところで句点を施す。それ以下、章の大意をまとめたり、別に賛歎や勉励の言葉を付して結びとしている場合には、句点を施す。

一、上文で然る所以を明らかにし、下文で「此」字や「是」字を用いて再び上段を示して、当に然るべ

き所としてまとめたり、あるいは主意をまとめたりする場合は、みな「此」字や「是」字の上に句点を施す。下段の文意が短く急迫である場合は、「此」字や「是」字の上に読点を施す。

一、上文で然る所以を明らかにし、下文で「故」字を用いて、当に然るべき所としてまとめる場合は、「故」字の上に読点を施す。上文が長文で、「故」字の下文の見解も長文である場合は、「故」字の上に句点を施す。

一、『或問』中の質問文の末尾の「何也」「何ぞや」、「若何而用力邪」「若何にして力を用ふるか」、「奈何」、「亦可得而聞其説之詳乎」「亦た得て其の説の詳らかなることを聞くべきか」、「如之何」「之を如何せん」といった類は、みな「何也」などの上に読点を施す。「何也」などの上に「者」字がない場合や、一句が短い場合は、読点を施さない。また大段落の中で、己に自問している時の「何者」「何となれば」、「何哉」「何ぞや」、「何則」「何となれば」、「何也」といった類で、そのうえ自ら大段落の意を明らかにしている場合は、みな「何者」などの上に句点を施す。

### 發音例。

並考許叔重説文、及鄭夾漈六書略、每字有兩音者、先依夾漈所正叔重之誤者、餘方依叔重。先正始音、然後依本文音義、隨四聲圈發。其音義參陸氏經典釋文、賈氏羣經音辨、大抵以朱子爲主。

〔校異〕



a 先：叢書集成本、「之」に作る。 b 以：叢書集成本・四庫全書本、「依」に作る。

〔注釈〕

(1) 許叔重説文…<sup>後漢</sup>許慎『説文解字』。叔重は許慎の字。本誌第一五号五九頁。

(2) 鄭夾溲六書略…<sup>清</sup>鄭樵『通志』二十略中の一。夾溲は鄭樵の号。本誌第一五号五九頁。

(3) 叔重之誤：『通志』卷三五・六書略第五「論象形之惑」、「論一二之所生」などでは、許慎の説が具體例をもつて批判され、「猶不達六書之義」（猶ほ六書の義に達せず）、「多虚言」（虚言多し）等と見做される。

(4) 正始音…<sup>清</sup>王柏『正始之音』、本誌第一五号五三頁。

(5) 四声圈発：漢字の四声を示すために文字の四隅に付ける点を、圈発点という。例えば、『分年日程』の底本（元刊本）では、「読む」という意味の「読」字には圈発点を附さないが、文中での区切りを示す「読点」の意味の時の「読」字には右上に圈発点（。）を施している。

(6) 陸氏經典釈文…<sup>清</sup>陸德明『經典釈文』、本誌第一六号一二五頁参照。

(7) 賈氏群經音弁…<sup>北宋</sup>賈昌朝『群經音弁』、本誌第一六号一二五頁参照。

〔通釈〕

発音の例。

許慎『説文解字』と鄭樵『六書略』とを併せて考察し、一文字に二種の音がある場合は、まずは鄭樵が許慎の誤りを正したのに従い、それ以外は許慎に依拠する。次いで『正始之音』、それから本文の音義に

依拠し、また四声を表す圈発点に従う。音義は、陸徳明『經典釈文』と賈昌朝『群經音弁』とを参照するが、基本的には朱子を主とする。

所用點子。

以果齋史先生法、取黒角牙刷柄、一頭作點、一頭作圈、至妙。凡金竹木及白角、並剛燥不受朱、不可用也。

〔造法。先削成光圓如所欲點大小、磨平。圈子先以錐子鑽之、而後刮之如所欲。〕

〔校異〕異同無し。

〔注釈〕

(1) 点子：句読点を打つ道具のこと。「子」は、小さいものや道具に付加する接尾語。

(2) 果齋史先生：元史蒙卿、果齋は号。程端礼の師。本誌第一四号一二〇頁参照。

〔通釈〕

使用する点子。

史蒙卿先生の方法に従って、黒角・牙・刷毛・柄を用いて、片側では点を打ち、片側では圈点を打てるようにすれば、極めて美しく点を打てる。金属・竹・木・白角などは、いずれもとても乾燥しており、朱墨を受け付けないため、用いてはならない。「作り方。まずは好みの点の大きさに削り、滑らかな円形に仕上げから、平らに磨く。圈点用のものは、まずは錐で穴を開けてから、好きなように削る。」

用丹鉛法。

點書用丹。丹用當日新煎膠調用。「或揉成錠子。」正誤、用鉛粉、凡有誤處、先以墨筆改正誤處、文義分明爲底、却以粉筆蓋之、乃填寫粉上。「粉久必脫、不如紙貼之爲愈。」所以必須先改正分明者、蓋防經久脫落、欲底還可攷也。須以鉛粉水浸七日、日日攪動、待澄、逼去浮水、以去鉛氣、待盤內乾、却用當日新煎阿膠調揉爲錠子磨用。凡鈔書之法、亦須改正底本分明、然後剪紙貼之寫淨、切不可鑿去誤處爲孔補貼、久之脫去、文義不可攷矣。切戒。貼誤法、厚齋王先生親教云、平生所自用者。

〔校異〕

a 鉛：四庫全書本、「鉛」に作る。 b 紙：叢書集成本、「以紙」に作る。 c 剪：叢書集成本、「翦」に作る。 d 文義：叢書集成本、「文無」に作る。四庫全書本、「無文」に作る。

〔注釈〕

(1) 阿膠あまろう：山東東亞産の藥石をいう。

(2) 厚齋王先生へうしやう：王応麟（一二二三～一二九六）、字は伯厚、厚齋は号。浙江鄞県の人。著に『困学紀聞』、『玉海』などの書がある。伝は『宋史』卷四三八、『宋元学案』卷八五など。程端礼（一二七一～一三四五）も同じ鄞県出身であるから、その早年に王応麟に教えを受けていたのであろう。

〔通釈〕

朱墨や鉛粉を用いる方法。

書に句読点を打つには、朱墨を用いる。朱墨は、その日新たに煎じた膠を調用する。「あるいは練つて延べ板状にしておく。」およそ誤りを正すには、鉛粉を用いる。誤った箇所は、まずは墨筆をもつてそれを改めて、文義を明確にして草稿とする。そして粉筆を用いて塗りつぶし、鉛粉の上に填寫していく。「鉛粉は久しくすると、必ず剥落するものなので、紙を貼つて補正した方がよりよい。」必ず始めに改正し、文義を明確にしておく理由は、久しくして鉛粉が剥落した時に、草稿をまた考え直せるようにしておくこととするためである。鉛粉は七日間ほど水に浸し、毎日掻き混ぜて、澄み切ってくるのを待つてから、水に浮いてきたものを捨てて、鉛気を除去し、碗の内で乾燥するのを待つ。それからその日新たに煎じた阿膠あかを調用し、練つて延べ板状にして、磨いて用いるのである。およそ加筆の方法は、改正した草稿が明確になつた後に、紙を切つて貼り付けて清書するのがよい。誤つた箇所を削つて穴を開け、そこを補修するようにして紙を貼り付けるべきではない。久しくすれば剥がれ落ちて、文義が考え直せなくなるからである。これは、切に戒めなければならぬことである。誤つた箇所に紙を貼り付ける方法は、王応麟先生自らが教授して、「私がいつもやっていることである」とおっしゃっていたことである。